

【短 報】

馬円虫症疑い事例

荒木 美穂, 長島 裕美¹

1) 沖縄県宮古家畜保健衛生所(〒 906-0012 宮古島市平良西里 1951)

馬の円虫症は、円虫科Stlonylidaeに属し大円虫と総称される普通円虫(*Stlonylus vulgaris*), 無歯円虫(*S.edentatus*)および馬円虫(*S.equinus*)の感染によって起こる。これら大円虫の病原性は、幼虫の体内移行と成虫の腸管内吸着による物理的な障害による。

今回、死亡した成馬1頭で本病を疑う事例に遭遇し、九州・山口・沖縄病理事例研修会において検討したので概要を報告する。

病 歴

馬(宮古馬), 年齢不明(成馬), 雄。愛玩用として当該馬 1 頭を飼養していたところ, 2010年4月20日柵を越え脱走, 外傷(口角部)を負った。翌日, 呼吸困難, 昏睡状態になり, 深夜に死亡した。

検査方法

病理組織学的検査は、主要臓器(肝, 脾, 腎, 心, 肺)および消化管, 肺動脈, 皮膚(口角部)を材料とした。それらを 10%中性緩衝ホルマリン液で固定したのち, 定法により薄切切片を作製し, ヘマトキシリン・エオジン(HE)染色およびベルリン青染色, 抗酸菌染色, ギムザ染色およびPAS染色を実施した。細菌学的検査は、主要臓器を定法により培養した。

剖検所見

肺ではびまん性に粟粒大白色病巣が散在し, 肝臓では形状不整な白色病巣が多発(写真1), 小腸では出血斑がみられ, 盲腸では腸ヒモに沿って小豆~大豆大白色結節が散在していた(写真2)。また肺動脈基部の内膜に白色乾酪様疣贅物が付着していた(写真3)。中枢神経系については検索しなかった。



写真 1 肝臓の形状不整な白色病巣



写真 2 盲腸の白色結節

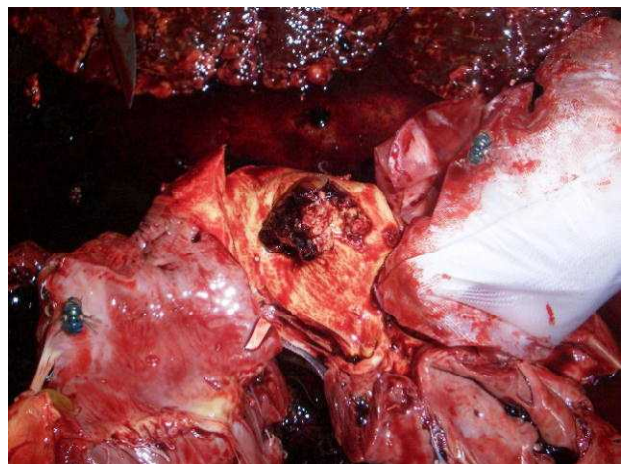


写真 3 肺動脈基部内膜の疣贅物

組織所見

肝臓では、好酸性の壊死した細胞塊を含む大小さまざまな肉芽腫が多発し、多核巨細胞、結合組織、好酸球によって包囲されていた(写真4)。またヘモジデリンを貪食したマクロファージや、肥満細胞の浸潤もみられた。抗酸菌染色、ギムザ染色およびPAS染色で、病変部に原因と思われる病原体は認められなかった。肺では、石灰化巣を含む肝臓と同様の好酸球性肉芽腫がみられた(写真5)。盲腸では、粘膜下組織や筋層に好酸球性肉芽腫が多発し(写真6)、粘膜固有層には好酸球や肥満細胞が浸潤していた。空腸では粘膜下組織で出血がみられ、好中球が浸潤していた。肺動脈基部の疣贅物は、内皮下層で膿瘍を形成しており、好酸性の構造物を含んでいた。

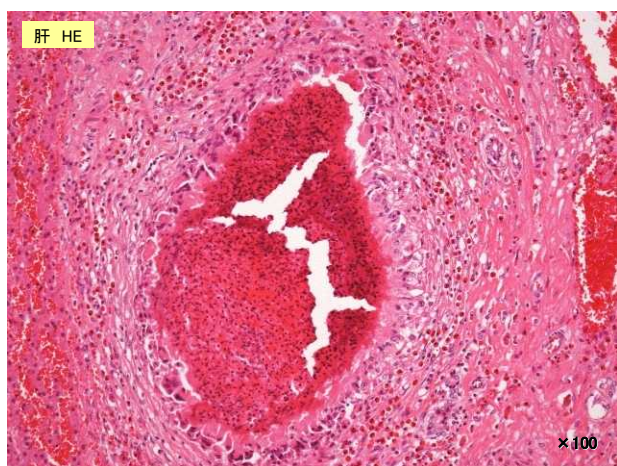


写真4 肝の好酸球性肉芽

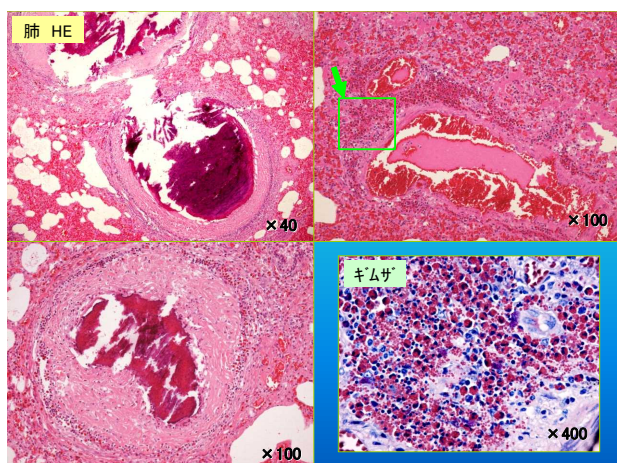


写真5 肺 石灰化巣を含む好酸球性肉芽腫

右下は矢印部の拡大(ギムザ染色) 好酸球多数



写真6 盲腸筋層の好酸球性肉芽腫

病原検索

細菌検査では、主要臓器から同様に複数菌種が分離されたが同定不能であった。その他、寄生虫検査(虫卵検査, PCRなど)は実施していない。

診断と討議

提出標本(肝)についての組織診断名は、馬の肝臓にみられた線維化を伴う好酸球性肉芽腫とされた。病変形成部位等から無歯円虫による幼虫移行症を疑ったが、虫体は確認できなかった。しかしながら、細菌検査および特殊染色によるその他の病原微生物(抗酸菌, Tyzzer菌, 真菌など)の関与が否定されたことより、疾病診断は馬円虫症を疑うとされた。